

戦前における天皇陵治定と「皇陵巡拝」

はじめに

明治憲法の発布によって「万世一系」の理念が標榜されると、矛盾を起さないためにもこれまで明確に決定されていなかつた歴代陵の治定が喫緊の課題となり、顯宗天皇陵をはじめいくつかの陵墓が治定されたが、果たしてそれは必ずしも学術的に正しいというわけではない。これらの天皇陵はあくまで『記紀』などの上代文献の記述をもとに推定されたものであり、具体的な発掘調査の成果を経て治定されたものは数少ない。例えば称徳天皇陵は奈良時代に築造されたにもかかわらず、佐紀古墳群の前方後円墳（佐紀高塚古墳）に治定されている。

また、一九〇〇年代初頭から、治定された天皇陵を巡る「皇陵巡拝」という活動が生じる。特に活動が顕著にみられるのは明治天皇の崩御後まもなくである。明治天皇陵は当時の一般民衆が初めて目にする「リアルタイムで築造された巨大天皇陵」であり、その感動は筆舌に尽くし難いものであつただろう。初めこそ崇敬の念をもつて行われた巡礼ではあつたが、「陵印」といったスタ

文学部文化史学科 畠田瑛音

ンプが置かれるようになるなど、次第にレジャー目的の側面をもつようになった。

本稿では、近代における天皇陵治定の実態や、その産物として生じた陵墓巡拝に関する詳細を論じていく。かなり概説的な文章となってしまったが、本稿を機に、現在まで続く陵墓問題の根源的事象に関する知識を涵養していただけたら幸いである。

第一章 天皇陵の決定

十七世紀から十九世紀前半、いわゆる「鎖国時代」において、徳川光圀や蒲生君平、本居宣長をはじめとしたいわゆる「好古家」たちによって荒廃した天皇陵の「探索」が始まる。当然ながら好古家たちは体系化された研究手法に即して天皇陵を推測していたわけではない。日本人の思想的淵源は文字（万葉仮名など）の使用によって次第に顕現するわけであるが、その萌芽を上代以前の歴史に求めていたのが好古家である。簡潔に述べると、彼らの活動の根幹をなすものは「純粹な探究心」であり、そこに体系的な学問要素はあまり必要とされなかつたのである。とはいってもの、彼らの探索活動は無碍にされるべきものではなく、事実として近代における天皇陵治定の際も多少なり参考とされている。のちに挙げる「神武天皇陵」の例がそれである。

【A】個人論文

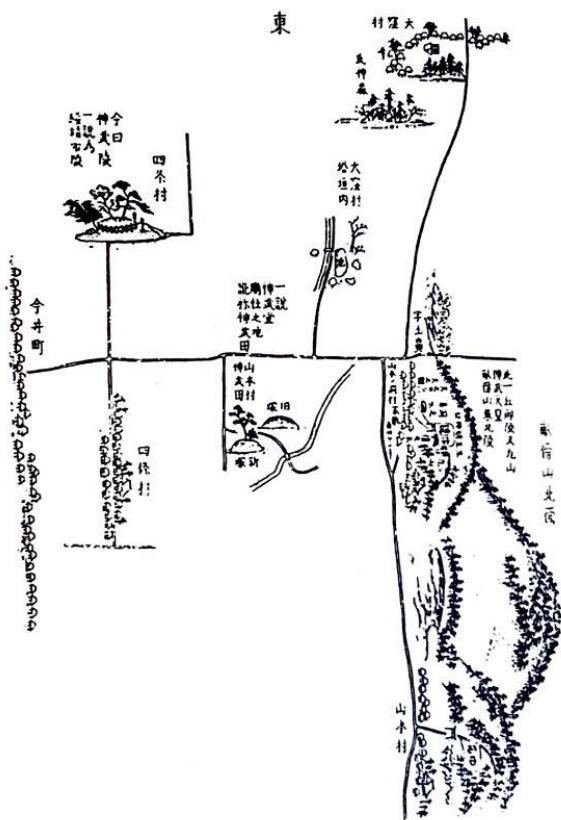
元禄・享保年間以前に決定されていた天皇陵は三十四陵、十八世紀から明治時代以前に新たに決定された天皇陵は五十五陵となる。

明治時代になると、新政府によつて天皇陵の明確な「治定」が行われるようになる。「万世一系」の理念を標榜し、好古家たちによつて集積されたデータを参考にしながら確定された。ここで「神武天皇陵」の事例について挙げておきたい。治定前の神武天皇陵の候補地は合わせて三箇所あり（左図参照）、かの貝原益軒や川路聖謨たちによつて支持された「神武田（じぶでん）説」、元禄年間の江戸幕府の皇陵探索によつて定められた「四条村塚根山説」、竹口尚重によつて支持された「敵傍山丸山説」といった三説が鼎立する状況となつたが、神武田周辺の字名が「ミサンザイ（＝ミササギの訛りか）」であつたことから、最終的に「神武田説」が採用されるに至つた。このように、好古家たちの活動の成果は近代にも引き継がれており、そこに断絶があつたわけではない。

明治時代に新たに決定された天皇陵は十九陵であり、ここから昭和時代にかけて全ての天皇陵が確定されていく運びとなる。

巡拝が始まる以前に、単純な陵墓の参拝があつたことに注目しておきたい。その先駆けとなつたのは明治時代後半における奥野七陣の「報国社」結社・活動である。ここで活動の一環として神武天皇陵への参拝者を募つていたことは着目すべきであろう。

第二章 「皇陵巡拝」の成立と発展



（図）江戸期の神武天皇陵推定地周辺地図（辻本正教『洞村の強制移転・天皇制と部落差別』解放出版社、一九九〇年より引

【A】個人論文

う。その他にも奥野は明治三十一年（一八九八）に『歴代御陵墓参拝道路御宮址官国幣社便覧』を発行しており、陵墓の参拝を帝國臣民の義務として主張していた。当初の天皇陵の参拝・巡拝は明らかに参拝目的であったことは言うまでもない。

転機となつたのは明治天皇の崩御である。当然ながら追慕・崇拝目的での参拝も多かつたが、「聖帝」と謳われた明治天皇の陵墓がどのようなものであるのかといった単純な興味をもとに、多くの人が明治天皇陵を訪れることとなつた。ここで有効な輸送手段となつたのが、明治四十三年に開業された京阪電車である。

参拝客を電車によつて輸送するといった発想は、この後に紹介する大正天皇陵の参拝においても利用される画期的なものであつた。

この陵墓参拝ブームは明治時代以降も続き、大正六年（一九一七）には「大阪毎日新聞」社長の本山彦一によつて『歴代帝陵巡拝図』の作成・配布が行われている。また、彼は「皇陵参拝会」というものを結成し、各地の天皇陵を参拝する有志を募つていった。この皇陵参拝会の活動は大阪毎日新聞によつて積極的に報道され、活動に触発された人々が参拝会参加及び新たな参拝会の結成を行なつていった。ここにおいて「皇陵参拝」という語が大々的に使用されるようになる。

その後、大正天皇が崩御するにあたつて、東京・多摩の地に天皇陵が築造されることとなつた。ここにおいてサラリーマン層を中心として休暇の外出先に陵墓が選出されるようになつた。有

効な輸送手段として着目された京王電鉄はこれを利用して陵墓参拝に伴う観光を推進したほか、鳥瞰図で有名な吉田初三郎によつて『京王電車沿線名所図絵』が発行された際には、レジャー施設「京王閣」が併記されるなど、レジャー的要素を強くもつようになつた。

その後、軍国主義が強まっていくにつれて、文化的な営為の側面を伴つた「皇陵参拝」は次第に消滅していくこととなつた。

おわりに

以上が戦前における天皇陵治定と陵墓参拝の実態である。この時行われた治定や参拝によつて「天皇陵がここにある」という認識が強まつた。一方で、被葬者と陵墓自体の年代の差異や宮内庁の管轄を起因とした発掘調査の停滞など、現代まで様々な課題が残されているのもまた現状である。読者の皆様についても、ぜひご一考を願いたい領域である。

あとがき

学術論文としては相応しくないが、サークル活動全体を通して最後に寄稿する論文ということもあって、少しだけ回想に耽らせていただきたい。

幼い頃の私は（ごく当たり前のことではあるが）、生まれた瞬間から既に世の中のシステムの基盤が整つていたことに對して、形容しがたい魅力を感じていた。過去人類の営為によつて、ある

【A】個人論文

ときは愚直に、またある時は正しく歪ませられながらも、総じて偶然的に積み重なつていったラプスの中で生きていることが、身震いするほどに奇跡的であるとさえ思えた。このような衝動を胸中に据えたまま、現在まで絶えず様々な史跡・名勝を探訪し、気づけば歴史美術研究会の一員として周囲の方々と知見を深め合うこととなつた。本サークルの皆様は、これまで私が誰にも共有できなかつた関心分野を好意的に受け入れてくださいり、活動を通して様々な知見を教示してくださつた。この場を借りて感謝申し上げる。

さて、ここで私が伝えたいのは「歴史は身近にある」ということである。歴史学は専門性を持つ学問でありかつ親しみやすい学問でもあることは言及するまでもないだろう。あなたが生きている間に起こつた全ての出来事は、ミクロに捉えれば「自分史」の歴史的転換点であり、マクロに捉えれば連鎖的に全体の歴史を構築していくのである。特に後者はあなたが生きている・生きていたことの搖るぎない証左となりうる。今後の展望を見失つた際、あなた自身のこれまでの嘗為が世界の歴史を少しずつ動かしていることを思い出し、未来へ前進していく勇気を抱いていただきたい。

そして、どうか歴史美術研究会の活動を通して得た知見や経験、そして感動を、多少なりとも記憶に留めておいていただきたい。本サークルの歴史はあなたによつて紡がれたものであり、あ

なたの歴史は本サークルによつて彩られたものである。とても素敵なことではないだろうか。

参考文献

- 徳田誠志「『大阪』時代の陵墓巡拝について」『なにわ大阪研究 第7号』、二〇一〇年、八九一—〇五頁。
辻本正教『洞村の強制移転・天皇制と部落差別』解放出版社、一九九〇年。